

恵心僧都關係の説話について

—法花驗記と今昔物語を中心として—

高 貢

が歿後、師友や弟子、近親者、或は他の修行者に、しばしばその往生の様子を夢中で、或は直接に示している。これらの話を右の記事と関連づけてみると、これらの話が右の講会の結衆、結縁衆、或は講衆によつて、話され、伝承されたであろう事が推定できる。

天台淨土教は、平安時代中期に恵心僧都源信が出るに及んで、頂点に達した。源信は淨土信仰の実践的な運動として二十五三昧会、靈山院釈迦講等の講会を主催し、開催している。^(註1)二十五三昧会は寛和頃、横川首楞嚴院で行なわれたが、その規定である二五三昧式、横川首楞嚴院二十五三昧起請が現存している。その規定の中にも左の記事がある。即ち

若適有^(註2)往生極榮者、依^(註3)自願力、依^(註4)佛神力、若夢若覺、示^(註5)結縁人、若墮^(註6)惡道、亦以示レ此(二十五三昧式)

仰乞彌陀種覺觀音勢至、可^(註7)願^(註8)七日之内示其生處、隨^(註9)亦處

善惡^(註10)可^(註11)致志懸殊。(二十五三昧起請)

右の記事によると、結衆、或は結縁衆の一人が歿した時、その人がはたして往生したか、或は惡道に落ちたかを後の人々に示さなければならぬわけである。

一方、後述する二十五三昧結縁過去帳、或は往生伝、説話集にとられている、往生譚、法花靈驗譚等を調べると、聖人、持經者

二十五三昧会と靈山院釈迦講は源信が直接参加、主催しているが、後述するように、増賀や性空の弟子、関係者も参加している。これらの参加者の名前、或は行状は、首楞嚴院二十五三昧結縁過去帳、靈山院釈迦堂毎日作法に記載されている。これらの中には法花驗記や今昔物語に登場する人がいるし、また本論文に関連のある人もいるので、まず過去帳と毎日作法について略述す

(註3)

る。

前述したように、二十五三昧会は寛和頃より首楞嚴院で行なわ

れたが、その結衆、或は結縁衆の名前を記した二十五三昧結縁衆過去帳、及び結衆、結縁衆の行状を記した過去帳（首楞嚴院二十三昧結縁過去帳）が現存し、恵心僧都全集に所載されている。

現存の過去帳は残欠本であって、源信、貞久、相助、花山法皇、良範の五人の行状だけが記載されている。過去帳は長和二年（一〇一三）七月十八日始記である。後述するように、過去帳所収の

源信譚は法花驗記や統本朝往生伝等にとられており、また相助譚

は三外往生記の同話に影響を与えていたと考えられるので、過去

帳の書かれたのはかなり古い時期と考えられる。なお三外往生記には、相助以外に祥蓮、妙空、明普、念照、良陳、聖全の話が並んでとられていて^(註4)、その後に「祥蓮以下七人者、楞嚴院結縁念佛之衆也、江納言并為康等記、不レ載^(註5)此人等、二十五三昧帳中往生分也」とある。この事によって、過去帳には現存の五人以外の行状も記載されていた事が分る。現存の過去帳に記載されている五人のうち、本論文に特に関係のあるのは源信、花山法皇、相助で

のあるのは、源信、慶範、入妙、円救、鎮源、春久、明快、覺超である。

鎮源は法花驗記の著者であり、法花驗記には「首楞嚴院沙門」とある。法花驗記の成立の時期については、その序文に「長久之年季秋之月記矣」とあり、今日ではその頃までに書かれたとされている。

註1 二十五三昧会等について、井上光貞氏（日本淨土教成立史の研究）がくわしく述べておられる。

2 同様の記事は往生要集（大文第六の第二「臨終の行儀」）にもある。

3 過去帳と毎日作法については、井上氏、宮崎円遵氏（中世仏教と庶民生活）等が述べておられる。

4 これらの人々の名前は二十五三昧結縁衆過去帳にもある

5 延暦寺首楞嚴院源信僧都伝、山門堂舎記。

6 大日本史料（寛仁元年六月十日条）所収。

II

ある。

次に靈山院釈迦堂毎日作法について述べる。靈山院は正暦の頃首楞嚴院の南に建立された堂であるが^(註5)、その堂で釈迦講が行なわれた。ついで寛弘四年（一〇〇七）に毎日作法が定められた（來迎寺文書）。これは靈山院における飲食、雜役、供養、經行、宿直等の規定である。來迎寺文書には毎日作法に統けて、釈迦講の

講衆と考えられる名前が書かれているが、そのうち本論文と関係法花驗記の僧都伝（卷下第八十三「楞嚴院源信僧都」）のうち、

過去帳の最初に源信の伝が記載されているが、この源信伝は現存の源信諸伝のうち最古のものである^(註6)。

過去帳に統いて延暦寺首楞嚴院源信僧都伝が書かれた。過去帳の僧都伝と源信僧都伝とは、僧都の誕生から、觀山に登り、名声が世に聞えるまでの話がかなり類似しており、この記事について両者に何等かの関係があつたのではないかと思う。

僧都が寂山に登るまでの記事は過去帳と一致している。他の話は過去帳ではなく、他の資料か口伝によつたのである。源信僧都伝との関係は全然ない。僧都が臨終の時、慶祐阿闍梨だけに、死後極楽に生れるであろうと告げるが、慶祐は過去帳、源信僧都伝には登場しない。それでは鎮源は慶祐の話をどこから得たのであらうか。鎮源が横川と関係がある事は前述したが、慶祐を別の話について調べると、今昔物語卷十七第九「僧淨源祈地藏絆與老母^{註3}」では横川の僧淨源は慶祐の弟子である。この二話によつて慶祐が横川と関係があり、この話が横川を中心に伝承された事が推定できる。

今昔物語の源信傳（巻十二第三十二「横川源信僧都語」）はどうから話をとり入れたのかといふと、他の話の場合、今昔物語は法花驗記とかなり一致している話があつて、その場合今昔物語はそれらの大部分の話を法花驗記によつていると考えられる。この話については両者の話は人名、筋、文章が一致している。そこで今昔物語のこの話も法花驗記によつて見えてさしつかえないと思う。

過去帳の僧都伝に僧都の姉妹の記事がある。その第三女についての記事は左の通りである。

第三女現在是極善人也。書寫法花經。恭敬頂戴矣。河内國有ニ尼。往年借之。時々拜見。所住草庵。遭火燒亡。隨身資具。皆成灰燼。唯此經一部在灰中獨存。

この記事は源信僧都伝と法花驗記には記されていない。所が今

昔卷十二第三十「尼願西所持法花經不燒給語」にこれと同様の話を載せている。今昔物語の願西尼の話は二段に分ける事ができる。第一段は願西尼は道心があり、法花經を持し、念佛を唱え、世の人がこれを尊んだ話である。第二段は願西尼が寿蓮威儀師の妻の邪氣を払う為に經を貸した。ある時寿蓮の家に火が出て家は燃えたが、經は焼けなかつたという話である。

第一段は法花驗記（巻下第百「比丘尼願西」）と一致しており、今昔物語はこの話を法花驗記によつて見られる。第二段は直接の出典とすべき文献はない。過去帳の第三女の話が第二段と類似している。しかし両者を比較すると、過去帳の河内國の尼が今昔物語では寿蓮威儀師の妻となつてゐる。また今昔物語の話は筋も複雑になつてゐる。そこで過去帳の記事は今昔物語第二段の直接の出典とはなり得ない。

寿蓮の伝記は不明であるが、法花驗記（巻中第四十一）では定照僧都に誹謗の詞を言った為に非業の死をとげたとされている。この話の始めに「僅聞^{註4}古老伝」とあるので、寿蓮の話は口伝されていたと見てよいであろう。過去帳の河内國の尼がどこで寿蓮の妻に変化したかは不明である。ただ前述したように、過去帳も法花驗記も横川とは密接な関係を持つてゐる。この事から考へると、願西尼の話も、寿蓮の話（寿蓮は山階寺の僧であるが）も、その頃横川で伝承されていたと考えられる。

過去帳の僧都伝に僧都の母の話が記されている。即ち

時赴公請。有所得物。撰^{註5}貴贈母。母泣報云。所^{註6}送之

物。雖レ非レ不レ喜。遁世修道。我所ノ願也。即隨母言。永絶萬縁。隱居山谷。修淨土業。

これと同様の話は、源信僧都伝、今昔物語、発心集、私聚百縁集等、説話集その他にしばしば見る事のできる話である。今昔物語（卷十五第三十九「源信僧都母尼往生語」）ではどのようになっているかといふと、その要旨は、僧都が三条大後の法花八講に召された。その時賜った物を母に贈った。母からの返事では僧都を出家させたのは名僧にする為ではないといましめてあった。後、僧都は母の死に間に合つて、往生を遂げしめたという話である。

過去帳と今昔物語との話はかなり相違しているので、過去帳が今昔物語の直接の典拠になつたとは考えられない。源信の母の話は源信僧都伝にも記載されている。即ち

先是、邂逅預_三公私之請用。若有_二達觀物、先贈_二堂上。其母泣報曰、水薪寒溫之訪、非_二不_一嘆美者。尼之所_二願者、唯欲_一令汝竟究_二頼證菩提之道也。受_三其箴誨_二之後、永以書_一紳、不_二出_一山門。

源信僧都伝の撰述の由来によれば、何か先行の文献を参照している。僧都が叡山に登るまでの記事は両者一致しているので、源信僧都伝は過去帳を参考しているとも考えられるが、右の記事について言うと、両者の内容は一致するが、文章は完全に一致するとは言えない。僧都伝がはたして直接過去帳によつているかどうかは明きらかではない。

いずれにしてもこの話は元來横川に伝わっていたと考え事が

できる。過去帳が横川に関係がある事は前述したが、僧都伝も横川と関係があると思う。僧都伝は天台僧によつて書かれた先行の文献によつて、僧都入室遺弟横川慶範上徳の話を参照している。慶範は僧綱補任等には慶命大僧正の弟子としているが、僧都伝では源信僧都の弟子となつてゐるし、また前記靈山院祝迦講の講衆でもある。従つて僧都の母の話も、横川のこれらの事を中心として伝承されたと考え事ができよう。

註 1 源信の諸伝については宮崎氏が述べておられる。

「於是尚書右司郎、縱容命子曰、近曾有天台碩德、授記錄

僧都平生之書一卷、文詞殊錯、終止不允、汝宣筆削著述僧都之遺美、予即避席輯_二上徳之行狀、下愚不能述、懇雖預其文、棄以如忘、經兩年之間、一夜夢有僧、命云、汝若作横川僧都伝歟、答詞未陳、眠覺大明、由是不顧尋慧、握筆敍之、但彼記錄之外、加載往年僧都入室遺弟、横川慶範上徳相談、藤宰相供養經卷日之行事、及耆旧伝來、往生靈異趣、恐有紕謬焉、願賴、今日掘悟之文、必預當生引接之記矣」とある。

3 この話は実容撰の地藏菩薩靈驗記が典拠となつたと考えられる（真鍋廣濟氏「今昔物語と地藏菩薩靈驗記」文学・語学第七号）。

三

毎日作法の結果の一人に春久がいる。春久は今昔物語卷十二第

三十三「多武峯増賀聖人語」に登場する。この話は増賀が叡山に登って出家し、後に道心を發して多武峯に籠り、往生する話である。このうち叡山に登るまでの話は法花験記（卷下第八十二「多武峰増賀上人」と一致しており、今昔物語はその箇所を恐らく法花験記によっていると考えられる。右以後の話を今昔物語は何によっているかは不明である。増賀は臨終の時、「みづはさす」の歌をよみ、碁を打ち、泥障を頸にかけて舞っている。同様の話は続本朝往生伝や発心集に見える。しかしこれらの書と今昔物語とは内容にかなりの相違があるので、これらの書を今昔物語の出典とする事はできない。

春久は今昔物語では増賀の甥となつていて、増賀の臨終の時に登場するが、春久の登場は今昔物語だけで他書には見えない。続本朝往生伝や増賀上人行業記では、春久の代りに弟子仁賀が登場している。春久は他の文献に見えないので、毎日作法に見える春久が今昔物語の春久と同一人物とは必ずしも断定できないかもしれない。そこで増賀と横川との関係について述べると、増賀は源信と同じく慈恵大僧正良源の弟子である。良源は横川に住し、法花三昧堂を建立しているので（慈恵大僧正伝）、増賀は横川と関係があると見てさしつかえないであろう。増賀自身も始め横川に住していたが、後に如覚（藤原高光）の勧めによって多武峯に移つたとも伝えられている（多武峯縁起、多武峯略記）。また源信の主催した講会には、直接源信と関係のある僧だけでなく、下級官吏や庶民が参加しているが、増賀の弟子も参加したと考える事ができよう。相如はその一人である。相如は増賀の弟子である

が、前述の二十五三昧会の根本結縁衆の一人であり（二十五三昧根本結縁衆過去帳）、その往生の様子は過去帳に記されている。このように増賀も増賀の弟子も、横川と関係をもつてゐるので、今昔物語と毎日作法との春久が同一人物であるという推定も成り立つと思う。

増賀の伝は今昔物語以前には法花験記にある。増賀の行状や往生の様子は、春久や相如等によつて横川に伝えられ、それを鎮源が聞いたのである。（但し相如は増賀よりも先に歿しているので、増賀の往生譚は相如によつては横川に伝えられなかつたであらう。）春久は法花験記には出て来ないが、春久の没後、春久が増賀の話にとり入れられて、横川で伝えられた事もあり得ると考える。

註 井上氏（前掲書）が指摘されている。

四

二十五三昧会の根本結縁衆の一人に花山法皇がいる。法皇は横川と関係のある外、性空上人の住して書写山に御幸している。今日法皇著と称されている性空上人伝が存しているが、上人伝は現存する性空の諸伝のうち最古のものである。法花験記（卷中第四十五「播州書写山性空上人」）にも性空の伝は記されている。験記の始めの部分は性空上人伝とかなり類似しており、鎮源は恐らく性空上人伝を参照したと考えられる。験記の後半の話、即ち花山法皇が書写山に再度御幸の時、延源阿闍梨に上人の影像を図絵させた話は性空上人伝ではない。同様の話は書写山円教寺旧記

にあるが、旧記の記事はごく簡略であつて、参照したとは考えられない。

性空上人の話は今昔物語卷十二巻三十四「書写山性空聖人語」にも記載されている。今昔物語の性空譚を便宜上幾つかの段に分けて述べてみる。第一段は性空の生誕より育振山に移住するまでの話、第二段は毗沙門天の眷属が性空に仕える話、第三段は円融の御懃を祈る為に召されたが応じなかつた話、第四段は花山法皇が書写山に御幸し、延源阿闍梨をして性空の影像を写さしめた話、第五段は源心座主が書写山に行き、仏經を供養した話である。

右のうち第一段は性空上人伝と、第四段は法花驗記と内容、文章共に一致しており、今昔物語は恐らくこの両書を参考したと考えられる。他の段は今昔物語が直接参考したと思われる文献はない。それでも類話は先行文献に見る事ができる。即ち一乘妙行悉地菩薩性空上人伝（書写山円教寺旧記所収）に左の記事がある。

乙丸常隨。遣數十里。日内飯來。一事已上。不違其心。

天諸童子。以爲給仕。其是而已。若丸給仕。晝夜不離。是

鬼類也。爲人有恐。仍賜暇。雖一杯悲泣。遂以不許。

この記事は今昔第二段と類似している。両者とも性空の給仕人は超人であつて、他に迷惑を及ぼす為に暇を賜っている。一方両者の話の相違点を述べると、性空上人伝では乙丸、若丸の二人の童子が出て来るが、今昔物語では毗沙門天の眷属一人が登場する。また今昔物語の話は複雑になつていて、この性空上人伝を今昔物語の出典と見る事はできない。しか

し今昔第二段と同様の話が性空の弟子等によって伝えられていたと考え事ができる。なお天童龍神の類が性空に仕える記事は、簡単ではあるが法花驗記にも「復有現形承順走使、若々是天童龍神等歟」と出でている（この記事は性空上人伝ではない）。そこで右の記事と同様の話が横川にも伝えられていた事が分かる。

當時、持經者や聖人が孤立していたのではなく、相互に連絡を持っていた事は、源信や寂心（慶滋保胤）に讀上人詩（書写山旧記所収）があり、また寂照（大江定基）が入宋の時、性空が送別歌（続後撰集卷十九羈旅）を贈っている事によつても分る。また性空上人伝の著者、花山法皇は二十五三昧会の根本結縁衆の人であり、過去帳に法皇の行状が記されている。花山法皇の周囲の人々について考へると、性空の像を画した延源は飯室の僧（円教寺旧記）である。花山法皇と同時に出家した人に寂真（藤原義懷）と寂空（藤原惟成）がいる（大鏡）。寂真は飯室に住していれる。寂空は書写山が法皇の御願寺となり、ついで講堂が建立された時、講堂供養願文を作っている（円教寺旧記）。講堂供養の時の請僧の一人に嚴久がいる（円教寺旧記）。嚴久は法皇とも関係があるが、一方源信の弟子であり（僧官補任等）、二十五三昧会の結縁衆の一人である。法皇と直接関係のない人について考へると、円教寺旧記に尼入妙が病む時、性空は法花經を送っている（註⁴）。入妙の名前は来迎寺文書に积迦講の講衆の一人として見る事ができる。

これらの事によつて、花山法皇、或は性空上人と交渉を持つてゐた人達は、一方では書写山と、他方では横川と関連を持つてい

た事が分る。そこで性空の伝、逸話が性空の弟子だけでなく、横川にも伝えられた事が推定し得る。

註 1 性空上人伝に「花山法皇（中略）長保四年（一〇〇二）

三月六日重結縁。密命仙駕。問上人行状記之。」とあり、朝野群載等には花山法皇著となつてゐるが、書写山円教寺旧記（延照記）に「上皇勅扈從者令記。還御之後。（具平）親王取捨也。」とあつて、見平親王によつて手が加えられたと考えられよう。（川口久雄氏「平安朝日本漢文学史の研究」参照）。

2 大日本史料寛弘四年三月十日所収。なお本伝の撰述の由来については、末尾に「遣弟相議云。記録行状。于時寛弘七年十月十日矣。」とある。なお本伝は法皇著の上人伝と一致の箇所が多く、後者を参照したと考えられる。性空上人伝記遺続集には悉地伝について、「右伝者、長保四年御幸之時、法皇召問上人行状記之、還御之後、仰雲客被清書之、納仙洞文庫、而上人滅後、可撰賜上人伝記之由、門徒等望申之間、寛弘七年十月十日、彼記下之、名悉地伝也、儒家筆也。」とある。

3 寂真は飯室の安樂律院に住してゐた。安樂律院には叡桓がおり、寛和二年に源信が当院で供養を行つたのを機として、他の道心者と行法を修した（高山寺文書）。叡桓、及び叡桓の母の話は法花験記にある。後者の話は今昔物語にもとられてゐる。

4 神西郡尼入妙病時、奉送法花経第八巻。尼悦奉安火色綬

桂。忽二尺許騰空宛転。尼殊奇之。上紙一枚。敷於桂上。奉置乃留。

五

法花験記（巻上第三十九「叡山円久法師」）と今昔物語（巻二第三十八「天台円久於葛木山聞仙人誦經語」）に僧円久の話が出てゐる。法花記の話は、円久が叡山に登り、師について頗密の法文を習つたが、後道心を發して愛宕護山に籠り、そこで往生する話である。今昔物語の話を便宜上二段に分けると、第一段の円久が愛宕護山に籠るまでの話は法花験記と一致して、今昔物語は恐らく法花験記によつてゐると考えられる。第二段は円久が葛木山で修行していた時、仙人が来て偈を誦する話である。第二段は今昔物語以外に同一話がなく、この話がどこで伝えられているかは明きらかではない。所が第二段の終りに「返テ後、横川ノ源信僧都ニ此事ヲ語ケレバ、僧都、此レヲ聞テ、泣々々貴ビ悲ビ給ケリ。」とあって、円久と源信とつながりを持たせている。

それでは円久は實際は源信とどれ程交渉関係があつたのであろうか。法花験記では円久は叡山西塔院に住してゐたが、後に「移ニ住楞嚴院」とあるので、円久が横川と関係がある事が分る。また法花験記と今昔物語に、円久は聖久に師事したとある。聖久は良源と基増の弟子（僧綱補任、法中補任）であり、また首楞嚴院檢校、及び楞嚴三昧院十禪師に任せられている（皇太曆、山門堂舍記）。従つて聖久は横川と関係を持つてゐるわけであり、聖久の弟子円久が横川と源信に交渉を持っている事は充分考えられ

る。

毎日作法の後記の釈迦講の参加者の中に「円教」の名前が見える。聖久は法花験記では聖教（今昔は聖久）とある。久と教とは音が同じ為、書き変えられる可能性がある。毎日作法の円教が円久と同一人物と断定はできないが、あるいは同一人物ではないかと思う。

靈山院釈迦講の講衆のうち、法花験記と今昔物語との両書に見える僧は、右以外に明快と覺超がいる。明快については、兄覺念の話が法花験記卷中第七十八、今昔物語卷十四第十三に、覺超については、弟子永慶の話が法花験記卷中第五十三、今昔物語卷十四第二十一に見える。

明快は法花験記（今昔物語も同じ）に律師とある。明快が権律師になつたのは長曆元年（一〇三七）で、長久四年（一〇四三）

に権大僧都になつてゐる。従つて法花験記が撰せられた時（長久之年）はまだ権律師であった。明快の師は明豪、覺運、皇慶（天台座主記）等であるが、覺運は慈惠大僧正良源の弟子であり、明豪も良源と源信の弟子（僧綱補任、天台法花宗相承血脉図等）なので、明快も源信と近い関係に当ると考えられる。明快の逸話は続本朝往生伝に記されているが、その話によると、明快は入円の往生の様子を語るたびに涙を流したという。法花験記では覺念は

前生の因縁を知つて仏法を修行する話で往生する所までは書いていない。覺念の話は拾遺往生伝でもとり上げられている。拾遺往生伝では覺念は永承年間に没したと記されているので、法花験記

が撰せられた時は、覺念は在世中であった。

永慶は法花験記には覺超の弟子とあるが、僧綱補任では証空阿闍梨入室とある。そこで僧綱補任の説を信用すると、覺超の弟子といふのは誤りになるが、前述の慶範の例を考えると、必ずしもそうとは言えない。慶範の場合、僧綱補任等では慶範の弟子となりながら、源信僧都伝では源信の弟子とある。なお永慶が権律師になつたのは長久四年であるので、法花験記の撰せられた時は、律師に任せられる以前である。覺超は慈惠大僧正良源と源信の弟子であつて（慈惠大僧正伝、天台法花宗相承血脉図）、一般には横川の覺超と呼ばれていたらしい（赤染衛門集、袋草子）。覺超は靈山院釈迦講の講衆となつてゐる外、二十五三昧会の根本結衆の一人である。三外往生記所引の過去帳に祥蓮の行状が記されているが、この中で、祥蓮の往生の様子は覺超の夢に現われたとある。

右の二話は今昔物語にもとり入れられている。今昔物語は二話とも法花験記と一致しているので、法花験記からこの二話をとり入れたと考えられる。今昔物語のこの二話の中には、法花験記以外に他の資料や口伝からとり入れたと考えられる話はない。

註 日本書紀大系「今昔物語集」の頭注で指摘されている。

六

過去帳、毎日作法、法花験記とは関係ないが、源信と関係のある話として、今昔物語卷二十第二十三「比叡山横川僧受小蛇身語」をとり上げる。この話は横川の聖人が臨終間際に酢瓶に心を

とらわれた為往生できなかつた話である。この話に源信は登場しないが、この話の終りに源信の言葉を引用し、「然レバ死ナム時ニハ墓尤キ物ヲバ取隠シテ、仏ヨリ外ニ他ノ物ヲバ不可見ズトゾ、横川ノ源信僧都ハ語リ給ヒケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。」と批評を加えている。

今昔物語は話の終りに、その話についての批評、あるいは感想が附加されている。今昔物語を他の文献と比較すると、話そのものは一致していても、今昔物語の評、感想は他には記載されていない場合が多い。そこで今昔物語の評、感想の大部分は今昔物語撰者の附加したものと考えてよいであろう。しかし一部、打聞集(註1)や日本靈異記と、話だけでなく評が一致している場合がある。この場合はもちろん、今昔物語の評、感想は撰者自身による附加ではない。この話の場合についていふと、この話は他に出典、同一話となる文献がないので、この批評がはたして撰者の附加したものか、あるいは今昔物語にとり入れられる以前から、この話について伝承されたものかは断定し得ない。両者いずれの場合にしても、話には登場して来ない源信の言葉を批評の中に引用する事は今昔物語では他に例が少い。

右の源信の言葉は往生要集や臨終行儀(註2)に見える。しかしこれらと今昔物語の話とは文がかなり相違するので、今昔物語は直接これらの文献から源信の言葉を引用したとは思えない。「源信僧都ハ語リ給ヒケル」とあるので、むしろ僧都の言葉は口伝として残っていたのではないかと思う。

この今昔物語の批評が撰者の附加したものか、今昔物語以前か

らこの話についていたかは不明であるが、批評の附加されたこの話は源信に何か影響を受けている人によって扱われていたと考え事ができる。この話そのものは今昔物語以前にどこで伝承されたかは不明であるが、横川の僧に関する話であるので、元來横川で伝承されたと考え事ができよう。

註1 卷三第三十、卷十四第四十二の評は打聞集と一致しており、卷十四第十八、卷十七第三十五、三十六、三十七は靈異記と一致している。

2 若有病者。安置在中。以凡生貧染。見本房内。衣蓋衆具。多生态著。無心厭背(註3)、(註4)、(註5)、(註6)、(註7)、(註8)、(註9)、(註10)、(註11)、(註12)、(註13)、(註14)、(註15)、(註16)、(註17)、(註18)、(註19)、(註20)、(註21)、(註22)、(註23)、(註24)、(註25)、(註26)、(註27)、(註28)、(註29)、(註30)、(註31)、(註32)、(註33)、(註34)、(註35)、(註36)、(註37)、(註38)、(註39)、(註40)、(註41)、(註42)、(註43)、(註44)、(註45)、(註46)、(註47)、(註48)、(註49)、(註50)、(註51)、(註52)、(註53)、(註54)、(註55)、(註56)、(註57)、(註58)、(註59)、(註60)、(註61)、(註62)、(註63)、(註64)、(註65)、(註66)、(註67)、(註68)、(註69)、(註70)、(註71)、(註72)、(註73)、(註74)、(註75)、(註76)、(註77)、(註78)、(註79)、(註80)、(註81)、(註82)、(註83)、(註84)、(註85)、(註86)、(註87)、(註88)、(註89)、(註90)、(註91)、(註92)、(註93)、(註94)、(註95)、(註96)、(註97)、(註98)、(註99)、(註100)、(註101)、(註102)、(註103)、(註104)、(註105)、(註106)、(註107)、(註108)、(註109)、(註110)、(註111)、(註112)、(註113)、(註114)、(註115)、(註116)、(註117)、(註118)、(註119)、(註120)、(註121)、(註122)、(註123)、(註124)、(註125)、(註126)、(註127)、(註128)、(註129)、(註130)、(註131)、(註132)、(註133)、(註134)、(註135)、(註136)、(註137)、(註138)、(註139)、(註140)、(註141)、(註142)、(註143)、(註144)、(註145)、(註146)、(註147)、(註148)、(註149)、(註150)、(註151)、(註152)、(註153)、(註154)、(註155)、(註156)、(註157)、(註158)、(註159)、(註160)、(註161)、(註162)、(註163)、(註164)、(註165)、(註166)、(註167)、(註168)、(註169)、(註170)、(註171)、(註172)、(註173)、(註174)、(註175)、(註176)、(註177)、(註178)、(註179)、(註180)、(註181)、(註182)、(註183)、(註184)、(註185)、(註186)、(註187)、(註188)、(註189)、(註190)、(註191)、(註192)、(註193)、(註194)、(註195)、(註196)、(註197)、(註198)、(註199)、(註200)、(註201)、(註202)、(註203)、(註204)、(註205)、(註206)、(註207)、(註208)、(註209)、(註210)、(註211)、(註212)、(註213)、(註214)、(註215)、(註216)、(註217)、(註218)、(註219)、(註220)、(註221)、(註222)、(註223)、(註224)、(註225)、(註226)、(註227)、(註228)、(註229)、(註230)、(註231)、(註232)、(註233)、(註234)、(註235)、(註236)、(註237)、(註238)、(註239)、(註240)、(註241)、(註242)、(註243)、(註244)、(註245)、(註246)、(註247)、(註248)、(註249)、(註250)、(註251)、(註252)、(註253)、(註254)、(註255)、(註256)、(註257)、(註258)、(註259)、(註260)、(註261)、(註262)、(註263)、(註264)、(註265)、(註266)、(註267)、(註268)、(註269)、(註270)、(註271)、(註272)、(註273)、(註274)、(註275)、(註276)、(註277)、(註278)、(註279)、(註280)、(註281)、(註282)、(註283)、(註284)、(註285)、(註286)、(註287)、(註288)、(註289)、(註290)、(註291)、(註292)、(註293)、(註294)、(註295)、(註296)、(註297)、(註298)、(註299)、(註300)、(註301)、(註302)、(註303)、(註304)、(註305)、(註306)、(註307)、(註308)、(註309)、(註310)、(註311)、(註312)、(註313)、(註314)、(註315)、(註316)、(註317)、(註318)、(註319)、(註320)、(註321)、(註322)、(註323)、(註324)、(註325)、(註326)、(註327)、(註328)、(註329)、(註330)、(註331)、(註332)、(註333)、(註334)、(註335)、(註336)、(註337)、(註338)、(註339)、(註340)、(註341)、(註342)、(註343)、(註344)、(註345)、(註346)、(註347)、(註348)、(註349)、(註350)、(註351)、(註352)、(註353)、(註354)、(註355)、(註356)、(註357)、(註358)、(註359)、(註360)、(註361)、(註362)、(註363)、(註364)、(註365)、(註366)、(註367)、(註368)、(註369)、(註370)、(註371)、(註372)、(註373)、(註374)、(註375)、(註376)、(註377)、(註378)、(註379)、(註380)、(註381)、(註382)、(註383)、(註384)、(註385)、(註386)、(註387)、(註388)、(註389)、(註390)、(註391)、(註392)、(註393)、(註394)、(註395)、(註396)、(註397)、(註398)、(註399)、(註400)、(註401)、(註402)、(註403)、(註404)、(註405)、(註406)、(註407)、(註408)、(註409)、(註410)、(註411)、(註412)、(註413)、(註414)、(註415)、(註416)、(註417)、(註418)、(註419)、(註420)、(註421)、(註422)、(註423)、(註424)、(註425)、(註426)、(註427)、(註428)、(註429)、(註430)、(註431)、(註432)、(註433)、(註434)、(註435)、(註436)、(註437)、(註438)、(註439)、(註440)、(註441)、(註442)、(註443)、(註444)、(註445)、(註446)、(註447)、(註448)、(註449)、(註450)、(註451)、(註452)、(註453)、(註454)、(註455)、(註456)、(註457)、(註458)、(註459)、(註460)、(註461)、(註462)、(註463)、(註464)、(註465)、(註466)、(註467)、(註468)、(註469)、(註470)、(註471)、(註472)、(註473)、(註474)、(註475)、(註476)、(註477)、(註478)、(註479)、(註480)、(註481)、(註482)、(註483)、(註484)、(註485)、(註486)、(註487)、(註488)、(註489)、(註490)、(註491)、(註492)、(註493)、(註494)、(註495)、(註496)、(註497)、(註498)、(註499)、(註500)、(註501)、(註502)、(註503)、(註504)、(註505)、(註506)、(註507)、(註508)、(註509)、(註510)、(註511)、(註512)、(註513)、(註514)、(註515)、(註516)、(註517)、(註518)、(註519)、(註520)、(註521)、(註522)、(註523)、(註524)、(註525)、(註526)、(註527)、(註528)、(註529)、(註530)、(註531)、(註532)、(註533)、(註534)、(註535)、(註536)、(註537)、(註538)、(註539)、(註540)、(註541)、(註542)、(註543)、(註544)、(註545)、(註546)、(註547)、(註548)、(註549)、(註550)、(註551)、(註552)、(註553)、(註554)、(註555)、(註556)、(註557)、(註558)、(註559)、(註560)、(註561)、(註562)、(註563)、(註564)、(註565)、(註566)、(註567)、(註568)、(註569)、(註570)、(註571)、(註572)、(註573)、(註574)、(註575)、(註576)、(註577)、(註578)、(註579)、(註580)、(註581)、(註582)、(註583)、(註584)、(註585)、(註586)、(註587)、(註588)、(註589)、(註590)、(註591)、(註592)、(註593)、(註594)、(註595)、(註596)、(註597)、(註598)、(註599)、(註600)、(註601)、(註602)、(註603)、(註604)、(註605)、(註606)、(註607)、(註608)、(註609)、(註610)、(註611)、(註612)、(註613)、(註614)、(註615)、(註616)、(註617)、(註618)、(註619)、(註620)、(註621)、(註622)、(註623)、(註624)、(註625)、(註626)、(註627)、(註628)、(註629)、(註630)、(註631)、(註632)、(註633)、(註634)、(註635)、(註636)、(註637)、(註638)、(註639)、(註640)、(註641)、(註642)、(註643)、(註644)、(註645)、(註646)、(註647)、(註648)、(註649)、(註650)、(註651)、(註652)、(註653)、(註654)、(註655)、(註656)、(註657)、(註658)、(註659)、(註660)、(註661)、(註662)、(註663)、(註664)、(註665)、(註666)、(註667)、(註668)、(註669)、(註670)、(註671)、(註672)、(註673)、(註674)、(註675)、(註676)、(註677)、(註678)、(註679)、(註680)、(註681)、(註682)、(註683)、(註684)、(註685)、(註686)、(註687)、(註688)、(註689)、(註690)、(註691)、(註692)、(註693)、(註694)、(註695)、(註696)、(註697)、(註698)、(註699)、(註700)、(註701)、(註702)、(註703)、(註704)、(註705)、(註706)、(註707)、(註708)、(註709)、(註710)、(註711)、(註712)、(註713)、(註714)、(註715)、(註716)、(註717)、(註718)、(註719)、(註720)、(註721)、(註722)、(註723)、(註724)、(註725)、(註726)、(註727)、(註728)、(註729)、(註730)、(註731)、(註732)、(註733)、(註734)、(註735)、(註736)、(註737)、(註738)、(註739)、(註740)、(註741)、(註742)、(註743)、(註744)、(註745)、(註746)、(註747)、(註748)、(註749)、(註750)、(註751)、(註752)、(註753)、(註754)、(註755)、(註756)、(註757)、(註758)、(註759)、(註760)、(註761)、(註762)、(註763)、(註764)、(註765)、(註766)、(註767)、(註768)、(註769)、(註770)、(註771)、(註772)、(註773)、(註774)、(註775)、(註776)、(註777)、(註778)、(註779)、(註780)、(註781)、(註782)、(註783)、(註784)、(註785)、(註786)、(註787)、(註788)、(註789)、(註790)、(註791)、(註792)、(註793)、(註794)、(註795)、(註796)、(註797)、(註798)、(註799)、(註800)、(註801)、(註802)、(註803)、(註804)、(註805)、(註806)、(註807)、(註808)、(註809)、(註810)、(註811)、(註812)、(註813)、(註814)、(註815)、(註816)、(註817)、(註818)、(註819)、(註820)、(註821)、(註822)、(註823)、(註824)、(註825)、(註826)、(註827)、(註828)、(註829)、(註830)、(註831)、(註832)、(註833)、(註834)、(註835)、(註836)、(註837)、(註838)、(註839)、(註840)、(註841)、(註842)、(註843)、(註844)、(註845)、(註846)、(註847)、(註848)、(註849)、(註850)、(註851)、(註852)、(註853)、(註854)、(註855)、(註856)、(註857)、(註858)、(註859)、(註860)、(註861)、(註862)、(註863)、(註864)、(註865)、(註866)、(註867)、(註868)、(註869)、(註870)、(註871)、(註872)、(註873)、(註874)、(註875)、(註876)、(註877)、(註878)、(註879)、(註880)、(註881)、(註882)、(註883)、(註884)、(註885)、(註886)、(註887)、(註888)、(註889)、(註890)、(註891)、(註892)、(註893)、(註894)、(註895)、(註896)、(註897)、(註898)、(註899)、(註900)、(註901)、(註902)、(註903)、(註904)、(註905)、(註906)、(註907)、(註908)、(註909)、(註910)、(註911)、(註912)、(註913)、(註914)、(註915)、(註916)、(註917)、(註918)、(註919)、(註920)、(註921)、(註922)、(註923)、(註924)、(註925)、(註926)、(註927)、(註928)、(註929)、(註930)、(註931)、(註932)、(註933)、(註934)、(註935)、(註936)、(註937)、(註938)、(註939)、(註940)、(註941)、(註942)、(註943)、(註944)、(註945)、(註946)、(註947)、(註948)、(註949)、(註950)、(註951)、(註952)、(註953)、(註954)、(註955)、(註956)、(註957)、(註958)、(註959)、(註960)、(註961)、(註962)、(註963)、(註964)、(註965)、(註966)、(註967)、(註968)、(註969)、(註970)、(註971)、(註972)、(註973)、(註974)、(註975)、(註976)、(註977)、(註978)、(註979)、(註980)、(註981)、(註982)、(註983)、(註984)、(註985)、(註986)、(註987)、(註988)、(註989)、(註990)、(註991)、(註992)、(註993)、(註994)、(註995)、(註996)、(註997)、(註998)、(註999)、(註1000)、(註1001)、(註1002)、(註1003)、(註1004)、(註1005)、(註1006)、(註1007)、(註1008)、(註1009)、(註1010)、(註1011)、(註1012)、(註1013)、(註1014)、(註1015)、(註1016)、(註1017)、(註1018)、(註1019)、(註1020)、(註1021)、(註1022)、(註1023)、(註1024)、(註1025)、(註1026)、(註1027)、(註1028)、(註1029)、(註1030)、(註1031)、(註1032)、(註1033)、(註1034)、(註1035)、(註1036)、(註1037)、(註1038)、(註1039)、(註1040)、(註1041)、(註1042)、(註1043)、(註1044)、(註1045)、(註1046)、(註1047)、(註1048)、(註1049)、(註1050)、(註1051)、(註1052)、(註1053)、(註1054)、(註1055)

往生極樂記等の先行文献の影響が考えられるが、それ以外に横川で伝承された話が重要な素材になっていた事も充分考えなければならない。

今昔物語の右にとり上げた大部分の話は法花験記にある。今昔物語のそれぞれの話は法花験記と内容、文章共に一致しているので、今昔物語はそれを恐らく法花験記によっていると考えられる。ただそれぞれの話の中に法花験記にはない話が含まれている。これらの話の大半は直接の出典となっている文献は不明である。これらの話の中には先行文献に類話があるし、また話中の人物が過去帳や来迎寺文書に名前が見られる場合がある。これらの文献を参考すると、法花験記にないこれらの話も元来横川で伝

えられていたらしい事が推定できる。

今昔物語には他にも仏教説話や世俗説話があつて、これらごとくが横川中心に伝えられたかどうかは分らない。これらの話がどこで伝えられていたかは別の機会を待たなければならぬ。ただ今昔物語にとり入れられている話のうち、横川を中心として伝えられた話が主流をなしていたという事はできると思う。

附記

本論文作成に当つて、早稲田大学関係の諸先生、先輩、並に史料編纂所所員山中裕氏、書写山円教寺の方々のお世話をなされた事をお礼申し上げる。

紹介

岡 一男著

『大鏡・増鏡』

古鏡は読みたいが、その難解さの為にな

かなか読み得ないといふ人のために古典日本文学の現代語訳全集が出ている。この本

はそのうちの一つである。現代語訳という

と往々にして原作そのものから離れてしま

った全く別のつまらない作品の観を呈する

過程を独自の文学史觀によって明らかにし

恐れがあるが、この「大鏡・増鏡」は、この作品をこよなく愛し、長年研究を続けてこられたというこの上ない訳者を迎えて、原作の持ち味が充分に生かされている。又所々、適切な写真が挿入されているので、楽しみながら読むことが出来るであろう。現代語訳のあととの解説に於て著者は、まず古事記より始まる歴史文学の流れを述べ、古事記の文芸性の地盤の中から源氏物語とともに仮名文字の歴史物語文学が結実した

ている。又大鏡の成立、作者、構想などにも新しい見解が述べられているから、大鏡を研究する者も一読する必要がある。なお、鑑賞研究篇には、「大鏡」小島政二郎、「大鏡再説」中村真一郎、「増鏡作者の討検」石田吉貞、「増鏡と歴史」益田章があり、各々の立場からの鑑賞、研究であつて面白い。(古典日本文学全集13、四二〇頁、七〇〇円、筑摩書房刊)